

『ヨハネのアポクリュフォン』（ベルリン写本）

— 訳 註 —

大 貫 隆

以下は本論集第三八巻第二号（一九八八年三月）に所収の本文翻訳への訳註である。既存の欧米語訳は次のような略号で表記する。

Till=Die gnostischen Schriften des koptischen Papyrus Berolinensis 8502, hrsg., über. u. bearb. v. Walter Till, Berlin 1955.

Till/Schenke=Die gnostischen Schriften des koptischen Papyrus Berolinensis 8502, 2. erweiterte Auflage, bearb. v. H. M. Schenke, Berlin 1972.

Kasse=Bibliothèque gnostique I: Le livre secret de Jean: 'Αποκρυφον 'Ιωάννου, RThPh 97 (1964) 140-150, II: versets 1-124, RThPh 98 (1965) 129-155, III: versets 125-394, RThPh 99 (1966) 165-181, IV: versets 395-580 fin, RThPh 100 (1967) 1-30, über. v. R. Kasse.

Krause=Das Apokryphon des Johannes (BG 8502, 2), übers. v. M. Krause, in: W. Foerster (Hg.), Die Gnosis, Bd. 1, Zürich/Stuttgart 1969, 141-161.

Tardieu = Écrits gnostiques: Codex de Berlin (Sources Gnostiques et Manichéennes 1), introduction, traduction et commentaire par M. Tardieu, Paris 1984.

- (1) ヨハネ 16^{5・28} 参考。
- (2) 2 : Till/Schenke の復元 auð al[fm]a]h netin mače nc[ol] に従う。
- (3) マルコ 13³ 行伝 1¹² 参照。
- (4) Kasse, RThPh 98 (1965) 135 (V. 10) の復元 etn [pitn nt]pe に沿った意識 (R. Kasse, Textes gnostiques. Remarques à propos des éditions récentes du Livre secret de Jean et des Apocalypses de Paul, Jacques et Adam, Le Muséon 78 (1965) 71-98 特に 73 も参照)。Till: etn [pa pkah an]pe = 「地上のものなる光」
Till/Schenke: etn [psa mpin nt]pe = 「天の下の光」 Tardieu: "une lumière (irradiant) la partie inférieure du ciel".
- (5) alu は「義的」。「子供」と訳するのは Till/Schenke, Kasse (RThPh 98/1965, 135, V. 11), Tardieu, Krause は「青年」(Jüngling)。
- (6) 6 21⁵⁻¹⁸…本文の訳は Till/Schenke の復元に基く。Till (初版) の復元に従って訳せば、「しかし、[私には]その像が老人のように見え、その中には光があった。[私はじっと]彼(老人)を見つめた(が)、[この]奇跡が[理解でき]なかった。もしそれ(像)が[この]光(のために(?))多くの形(μορφῶν)をしているが[ひとつ(c)](mntoua)であるならば、その(=mntoua)の形(μορφῶν・複数)はその……を通して(または、[互いに入れ代わりながら])「現れているのである」。「または」もしそれがひとつであるのならば、「どうして」それ(mntoua)は三つの現れ方をしているのか。[彼は私に言った]、『ヨハネよ、な[ぜ君]は疑うのか。もし

私が君を「約五文字欠」。何故なら、「それ（像）は君にとって」見知らぬもの「ではないのである。しかし」おじ「ける」な。」

Kasse, RThPh 98 (1965) 135f (V. 12-15) の訳は 21¹³ までこの Till の訳とほぼ同じ。21¹⁶⁻¹⁷ を eita [menai] ntk oušmmo gar [etteide]a と復元し、「ヨハネよ、な「ぜ君」は疑うのか。（君に）「これらのことを教」えてあげようというのに。何故なら君は「この像にはまだ」馴染みがないのだから」と訳す。

Krause は 21¹⁸ の ešše 以下の条件文を直前の npe]ispere へ同格にかけ、「……[こ]の奇跡が「理解でき」なかった。すなわち、どうしてもそれ（像）がひとつであることができるのか、[その]光の中にあるその外貌は多様であるにもかかわらず。その現れた形は「互いに」入れ代わりながら「見えていた」。もしそれ（傍点筆者）がひとつであるならば、どうしてもそれは三つの形で現れているのか。……」と訳す。これでは傍点を付した「それ」が、「像」(21¹⁵・eine) あるいは「ひとつ」(21¹⁸・mtoua) のいずれを受けるのか曖昧。

- (7) 21¹³ eso の三人称・女性・単数形は 21¹⁸ shime 「一人の女」を受ける。H. M. Schenke, Bemerkungen zum koptischen Papyrus Berolinensis 8502. in: Festschrift zum 150 jährigen Bestehen des Berliner Ägyptischen Museums, Berlin 1974, 315-322, bes. 322 の異説 およびその結論については T. Onuki, Wiederkehr des weiblichen Erlösers Barbelo-Pronoia. Zur Verhältnisbestimmung der Kurz- und Langversionen des Apokryphon des Johannes, AJBI XIII (1987) 85-143, bes. 118ff に従う。

- (8) Kasse, RThPh 98 (1965) 136, n. 6 および Till/Schenke に従う piattōlm ... と読む。Till, Krause: piattō [h... 「混り得る者」。

- (9) Till/Schenke の復元に基く訳。Till, Kasse, RThPh 98 (1965) 136, Krause, Tardieu と impek [ho auō ng] ei

「〔顔を〕上げ〔そして来〕なさい……」。

- (10) (10) Till/Schenke の復元と区分に従う。Kasse, RThPh 98 (1965) 137 n. 2 は [eiouōš] enoi と読み「そして〔私が〕理解し〔たいと欲したとき〕、彼が私に言った……」とつなげる。Krause は「そして〔私は言った、』お話し下さい。私がそれを〕理解することが〔できるように〕」。しかし本文の復元は不詳。

- (11) この引用符は 45⁵ で終る。

- (12) Kasse, RThPh 98 (1965) 137 n.3, Till/Schenke: [če tmntou] a

- (13) Till/Schenke の訳 “daß er in einer bestimmten Weise geartet ist” は 22⁵。timine の定冠詞がうまく訳出できいない。

- (14) ἀρετῶν/ἀρετῆ の語呂合せ。ἀρετῆ は「始源」とも訳せる。直続の文脈を参照。

- (15) あるいは「何物」。

- (16) あるいは「生きるいう」。

- (17) Kasse, RThPh 98 (1965) 138 の訳は 23¹⁶⁻¹⁷ を脱落させている。(homoioteleuton!)

- (18) Kasse, RThPh 98 (1965) 139 (V. 27f) へ Krause が同様の訳。Till/Schenke は「如何る被造物および何人といえども彼を把握することはできない」。

- (19) Till 91 (25¹ の註) に従って敷衍。

- (20) 以下 (26⁹ 以下) で成立してくるプレローマ界の個々の神性(アイオーン)のどれか一つ? 直続の文脈からすると「アイオーン」は同時に「時間」・「時代」の意味を含む。

- (21) 25⁹。haro(f) は和蘭語。W. Westendorf, Koptisches Handwörterbuch, Heidelberg 1965~1977, 384.

(22) 25⁹ ero(f) は与格を示す前置詞。Kasse, RThPh 98 (1965) 140 (V. 43) は対格に $\epsilon\tau\iota$ “Et il (est) un moment qu'on n'a pas délimité” と訳す。

(23) Til 91 (25¹¹への註) はこの文の主語「彼」至高神とする (Krause も同じ)。その場合 efeirnoei の時称 (未来第Ⅲ形「彼は……認識するであろう」) が事柄上不整合になり、これを $\epsilon\sigma\tau\iota$ (現在第Ⅱ形) に修正にする。しかし 25⁹⁻¹² 全体が、元来欄外註であったものが本文の中へ侵入した結果である可能性がある。この場合「彼」個々のグノーシス主義者にとれば、前述の efeirnoei の未来形は、グノーシス主義者の終末論的自己認識を指すものとして無理なく説明がつく。Tardieu の訳は全く別の構文理解に基く。特に 25⁹⁻¹⁰ の訳にはかなり疑義がある。

(24) 本文の構文が混乱している箇所。NHC III 6¹⁷ 以下への類比で tinaōos と補充。Til/Schenke はここまで先行の疑問文に入れて訳す。

(25) ヨハネ 1¹⁸ 参照。

(26) ヨハネ黙示録 22¹ 参照。

(27) 27⁵ ir ouhōb. あるいは「行為となり……」。

(28) Krause は終始「彼」と訳すが、本文では明瞭に三人称・女性・単数形。

(29) 27¹⁹⁻²⁰ ouhoueit inrōme は不定冠詞 (下線部) にこだわって訳せば「と或る一人の第一の人間」。NHC III の並行箇所 (7²³) も同様。しかし NHC II の並行箇所 (5⁷) は定冠詞を使って pōorp inrōme と読む。

(30) 原文は三人称・男性・単数形であるが、意味上は直前の「第一の認識」のこと。NHC II の並行箇所 (5¹³) はギリシヤ語の表記 $\pi\rho\omicron\tau\eta\upsilon\omega\iota\varsigma$ (女性名詞) をそのまま採用。BG と NHC III (8⁷⁻⁹) はコプト語に訳したため

男性名詞 *psorp insooun* になってしまっている。プレーローマ界では男性的存在(アイオーン)と女性的それが「対」をなすという観念が、コプト語への翻訳によって不明瞭になってゆくよい例。但し後出註31と33に注意。

- (31) 本文は *esii* で三人称・女性・単数。これは「第一の認識」の背後にあるギリシャ語 *anōtheōs* に引かれたためと思われる。文法上は三人称・男性・単数形 *eti* と訂正が必要。Till 96 (28¹⁰ への註) 参照。

- (32) 「不滅性のこと」。

- (33) 28^{6・8} の「第一の認識」と同じ。

- (34) この三人称・複数の性別は不詳。

- (35) 29⁹⁻¹⁰ の *ete pehoueit inrōme* 「第一の人間」は直前の *peiot* 「父」の言い換えととる。Kasse, RThPh 98 (1965) 146 (V. 77) Tardieu 96 が同じ見解。Till/Schenke では「第一の人間」も後続の「父の五箇組」の一部であるかのように続ける訳文。

- (36) (36) 本文が損われている箇所。NHC III の並行箇所 (9⁸⁻⁹) は、「これが男女的なる五つのものであり、父の一〇のアイオーンである」。NHC II のそれ (6⁸⁻¹⁰) は、「これが男女的なるア〔イ〕オーンの五個組であり、アイオーンの一〇〔個組〕であり、これが〔父〕である」。原意はおそらく、「これが男女的なる五個組であり、生まれざる父のアイオーンの一〇個組であり、これが父である」。

- (37) 原意は「自ら生まれた者」。

- (38) 原文 (30¹⁷) の表記は *xc*。これを *χρονός* の略記形と見れば、「至善なる者」という訳になる。しかし、他ならぬ BG は多くの箇所 (31¹⁷, 32^{9・20}, 34¹², 45⁶, 58^{2・15}, 64¹⁴, 66¹³, 67¹⁹, 68¹⁴, 69¹⁴, 70⁹, 71³) で、他の写

本が pcoeis「主」としてるところを同じ略記形で表記している。この点から見ると xc はキリストである可能性が大きい。後出註76参照。

- (39) 文意がよく通らない箇所。NHC IIIの並行箇所(10²⁻³)は、「それは見えざる霊の至善で塗油されたからである」。Tiiiはこの原意が損われた形がBGの本文と見る。但し、そのためには30¹⁹の ouōth 「注ぐ」を ouōnh 「現れる」に修正し、この動詞から新しい文章が始まると考えることが必要。われわれの訳はこの修正に従ったもの。Kasse, RThPh 98(1965) 148 (V. 84) と Tardieu はこの修正を施さず、全く別の構文理解によって訳すが、文意がうまく通らない。

- (40) NHC IIIの並行箇所(10¹⁰)は「共に動く者」。同II 6³³⁻³⁴ / IV 10¹³も同じ。

- (41) Kasse, RThPh 98(1965) 149 (V. 89) は xc を一貫して「至善なる者」(l'Excellent)と訳す。前出註38参照。

- (42) naf aheratf を Tiii 102 (31⁸の註)に従って nef aheratf と修正。

- (43) 原文の読み nn を mn に修正。

- (44) 原文では不定冠詞と共に表記(ouennoia)。従って敢えて「」を付さない。

- (45) ninti = nnoute とする訳。Tiii 300f, Tiii/Schenke 323-325 を参照。

- (46) このギリシャ語の接続詞を反接の意にとるのが Kasse, RThPh 98(1965) 149 (V. 94) の訳。しかし、この場合、先行する「アウトゲネース」、「永遠の命」、「意志」の構文上の身分が不明となる。

- (47) Tiiiの復元に従う。

- (48) Tiii/Schenkeの復元 aufcök に従う。Kasse と Tardieu は aufcök と読んで「彼は……自らを完全な者にした」と訳す。

- (49) 構文上は「を」とも訳すことができる。この場合は、キリストが見えざる霊を称える意。Krause と Kasse, RThPh 98 (1965) 150 (V. 97f) がこの線。われわれの訳では、見えざる霊がキリストを称えるの意。Till/Schenke, Tardieu がこの解釈。
- (50) おそろく「見えざる霊」のこと。
- (51) Till 104 (32²⁰への註) と共に nte pex̄c pe を ete pex̄c pe と読む訳。Kasse は nte を属格詞ととって、直前の「光」の限定句として訳す。
- (52) Till の復元に従う。「光の神」という表現は後出 51⁷ にも。Krause は「霊の」。
- (53) Till 106 (33⁴への註) に従い ntsom̄nte を mnsom̄nte と読む訳。
- (54) III 12¹¹からの類推補充。Till 108 (34¹への註) 参照。
- (55) 35¹の並列の接続詞 min を III 12²⁶に倣って属格詞 min に修正する訳 (Till 110 の脚註参照)。Kasse, RThPh 98 (1965) 153 (V. 115), Tardieu は並列接続詞の訳。
- (56) 文脈から推すと「見えざる霊」のこと。
- (57) Kasse, RThPh 98 (1965) 154 訳ではこの部分が脱落 (homoioteleuton)。
- (58) 「見えざる霊」か「キリスト」のこと。
- (59) 35¹⁷⁻²⁰: NHC III の並行箇所 (13¹⁴⁻¹⁶) は、「私はあなたとアウトゲネースとあのアイオーン (単数)、すなわち、父・母・子なる三つの者、完全なる力を褒め称えます。」、同 II 9⁹⁻¹¹ は「私はあなたとアウトゲネースとアイオーン (複数)、すなわち、父と母と子の三つ、(および) 完全なる力を褒め称えるでしょう」。III の読みが原意を最も良く保存していると思われる。この原意、および、それが他の写本で崩れた理由について詳しく

は T. Onuki, AJBI XIII (1987) 122ff を参照。

- (60) 35¹⁸ の mn (niañ) を並列の接続詞とする訳 (Krause, Kasse, RThPh 98/1965, 154, V. 120 をよむ Tardieu も同じ)。Till/Schenke のみ前置詞 (= mit) となる。
(61) おそらく「見える霊」のこと。
(62) Till 114 (37¹⁻² への註) に従って töoun を tot と修正する訳。
(63) 37⁴⁻⁵ の「伴侶」と同じ。
(64) 37¹⁰ estöke ebol は辞書的にも訳出困難な箇所。Till 301f (= Till/Schenke 325) の解説参照。文脈から見ると「ヤルダバオート」が意味上の目的語。
(65) 後出 53¹⁰ 「光のエピノイア」参照。
(66) 原意は「支配者」。
(67) ギリシャ語は女性名詞。ヤルダバオートと「対」(wuxia) を成す女性的な存在で、この「対」はプレローマ界の頂点に立つ「見える霊」(至高神) とバルベロの「対」のコピーになっている。
(68) 39⁷ mmtsnoous を III 16⁹ に準じて mn mtsnoous と読む。mn は並列の接続詞。
(69) Kasse, RThPh 99 (1966) 166 (V. 139) と Krause に従い 39¹² inaggelos を与格にとる (39¹¹ impoua poua の in と同じ)。Till/Schenke は対格にとるが、文章が通らない。Tardieu は主語にとる。
(70) 39¹³⁻¹⁶ をこのように挿入文として訳するのは他には Kasse のみ。他の訳では文章が通りにくい箇所。天使の数が三六〇になる計算方法は不詳。
(71) 原意は「最初に生み出す者」。

(72) NHC IIIの並行箇所(16¹⁵⁻¹⁹)は、「諸力たちがアルキゲネトール、すなわち、暗黒と無知の第一のアルコールから現れてきた。その諸力たちについて言えば、彼らは彼らと呼ば出した者の無知の中にあった」。Till 120 (40³への註)は homoioteleuton (tmntatsooun) による本文の脱落を想定する。しかし、この場合には39¹⁹の Temporalis: nterouounh が後文を失なって浮いてしまう。われわれの訳は Till/Schenke, Krause と同じ。Kasse, RThPh 99 (1966) 166 (V. 142) は構文不明の訳。Tardieu は III に合わせた訳。

(73) 41¹⁻⁶ は文意困難な箇所。並行箇所 III 17⁶⁻¹² についても同様。——「彼らは確かに欲望と怒りからくる別の名前を持っている。これらすべて——要するに彼らの名前は二重である——は、彼らが上なる栄光で呼ばれるのが常である(名前であるが)、彼らがそう呼ばれたのは真理に即しているのである」。写本 II と IV には並行記事はないが、II 12²⁶⁻³³ に類似の文言(III と II のには欠)がある。それによると「天に属するものの栄光に即して」付けられた名前は彼ら(諸力)にとっては滅びとなり、反対に「アルキゲネトールによって付された名前」は、彼らに「力あるわざ」を行なわしめる。

(74) ヤルダバオトの別名。

(75) 以下、「第七」までコプト語原文でも(ギリシャ語原本におけると同様)すべて男性名詞。

(76) 42¹⁹ afir xc を Till 124 (42¹⁹への註)に従い afir coeis = 「の上に主である」、「支配する」と修正する訳。coeis の略記形 cs を BG の写字生が機械的に xc (キリスト)へ書き直したことを示す証拠箇所。前出註38を参照。Kasse, RThPh 99 (1966) 169 (V. 189) はいっども “il fut Excellent” と訳すが、われわれの訳にくらべて文脈に適合しない。

(77) 以下、「第七」まで主語も述語も原則として女性名詞。但し「第四」の述語 prōht 「火」(43¹⁸)のみコプト語

では男性名詞（註78参照）。41¹⁷—42⁷に列挙された男性名詞（諸力）と「対」を構成する。

- (78) Tardieu のみ “*jalousie*”（嫉妬）と訳す。おそらく *kōh* と読み直した訳。写本Ⅱの並行箇所15²¹にこのコプト語（男性名詞）が出るが、そこでは「第六」の勢力。BGの本文は明瞭に *kōht*（火）と読める。ギリシャ語原本では *στον*（女性名詞）が用いられていた可能性が大きい。神話上は女性名詞であることが重要であるが、意味上コプト語の対応語に移すと男性名詞になってしまうというディレンマに注意。前出註30参照。

- (79) 構文が混乱している箇所。われわれの訳は *Kasse*, *RThPh* 99 (1966) 170 (V. 202) ~ *Krause* に近い。Till/Schenke “und einen Äon nach dem Äonen-Aussehen, das von Anfang an im *tōzōs* der Unvergänglichen existiert”; Tardieu “et chaque éon est conforme aux éons primordiaux (constitués) suivant le modèle des *imperissables*”.

- (80) この引用符は22¹⁷のそれに対応。

- (81) 原語は *pexc* 以下 58^{2・15}、64¹⁴、66¹³、67¹⁹、68¹⁴、69¹⁴、70⁹、71³ にも出る。「キリスト」と訳すが、元来は *pēs* 「主」であったと思われる。この点については前出註38と76を参照。Tardieu は以下一貫して “*Seigneur*” と訳す。

- (82) 創世記1²。

- (83) 原文は *etnašōpe* で未来（第Ⅰ）形。Till/Schenke と共に並行箇所Ⅱ13^{22—23} / IV 21^{9—10} に準じて、*ntašōpe* と読み直す訳。

- (84) プレーローマ界のアイオーンたち。

- (85) 文脈から推すと、直後に出る「聖なる見えざる霊」のこと。Tardieu はプレーローマと同定。Till 133 (46¹⁵ ~

の註)はⅢ 21²に従い、af「彼は」をau「彼ら(兄弟たち)」に訂正することを示唆している。

(86) 「」を付したが原文では不定冠詞が付されている。次註参照。

(87) 47⁶⁻⁷ hitn oupronoia「プロノイアを通して」は「決めた」(47⁶ afir hnaf)と「回復する」と(47⁷ etaho)のいずれにもかけ得る。Till/Schenke, Tardieuは前者、Krauseは後者にかける。Kasse, RThPh 99 (1966) 174 (V. 229)は「義的な挿入句」として訳す。

(88) 47¹² tmehpsite ni pe「天」(女性名詞)を意味上の関係語として補った訳。Tardieuが同じ見解。写本Ⅱの並行箇所14¹²についてS. Giversen, Apocryphon Johannis. The Coptic Text of the Apocryphon Johannis in the Nag Hammadi Codex II with Translation, Introduction and Commentary, Copenhagen 1963, 73. 236fも同様。Till/Schenke, Kasse (RThPh, 99/1966, 174, V. 231), Krauseはむむむの箇所のtmehpsiteを「ずれも「九個組」と訳す。

(89) 「人間」(47¹⁵)は、48¹⁻²の「聖なる完全なる父」|| 48²「第一の人間」(これはさらに22⁹⁻¹⁵⁻¹⁶の「完全なる人間」と同じ?)か、あるいは27¹⁹⁻²⁰で不定冠詞を付されて「第一の人間」と表記されるバルベロ(前出註29参照)のいずれかを指す。直後の文脈とのつながりでは「父」(至高神)を指すと思われる。しかし、写本Ⅱ・Ⅳを含め、伝承史全体の傾向として見ると、「第一の人間」はバルベロを指して用いられる場合が多くなる。この点についてはT. Onuki, AJBI XIII (1987), 108fに詳しい。「人間の子」(あるいは「人の子」)は「父」とバルベロ(「母」)から生まれた「独り子」あるいは「アウトゲネース」(30⁴⁻⁸)のいふ。

(90) Till/Schenkeの復元に従う。Krauseの訳“er dachte, die Stimme [stamme von seiner Mutter]”とnouei an (47¹⁹)の否定詞が訳出できていない。この点Tardieuの訳“pensait, que la voix n'avait d'autre proven-

ance que sa mère”の方がよい。

- (91) Till/Schenke と共に写本Ⅱの並行箇所(14¹⁹)に準じて、aftsab]ouu と復元する訳。この場合、「彼ら」とはヤルダバオトとその配下の諸力たちのこと。Tardieu も同じ見解。Krause も同じ動詞「教える」を補うが、48の erof を目的語(「彼を」)にとる訳。このため47²⁰行末の ou 「彼ら」の構文上の役割が不明になる。Kasse, RThPh 99 (1966) 174 (V. 234) も47²⁰に同じ動詞を補うが、われわれの訳のように、「第一の人間」の直接的な自己啓示の意味にはとらず、「聖なる完全なる父、すなわち、第一の人間は、人間のかたちを(したものを)教示した」と訳す。

- (92) 下方の暗黒の水の中に映し出された「第一の人間」の像を見るために「首を垂れて見た」の意味を含む。

Tardieu の訳参照 “inclina la tête l'archontat tout entier……”

- (93) Till/Schenke が並行箇所Ⅲ 22¹⁰とⅡ 15⁶⁻⁷を組み合わせる形で復元した読みに基く訳。但し、この復元はかなり不確実。Till は auō[t]ou[ei]tou[ei] hin c[om nim astamio ebol h]n tco[mn]lepsych]e と復元し、「そして[全ての勢力たち]の[いずれもが]、その能力から[心魂を造り出した]と訳す。Kasse, RThPh 99 (1966) 175 (V. 241) はこの後半を「(彼の)心魂の能」力に従って、一つの心魂を創造した」と訳す。Tardieu は基本的に Till/Schenke の復元に従っているが、n]lepsych]e を「心魂のために」ではなく、「心魂を(特徴づける)」と補って訳す。

- (94) 49¹⁰ cin pesēt を Tardieu 305 は、プラトン『ティマイオス』77—83にある心魂の人間の創造についての記事の類比で、「内側から」(du centre = 肉体の中心部から)と訳す。但し、43¹⁰ iucīn tpe については“par le haut” (「上から」)。

(95) 以下、「第七」まで同様に補う。

(96) 43¹⁸ および註78を参照。

(97) 直前までの「勢力たち」を受けるとすれば「彼女ら」。「彼ら」は後続(50⁹)の「諸力たち」を先取りする訳。

(98) 50⁹ nhypostasis の n を同定の前置詞 (W. Till, *Koptische Grammatik*, Leipzig 1970⁴, §108) とする訳。定冠詞・複数ととって直前の「諸力たち」と同格に訳すのは Till, Till/Schenke¹ 50⁸ 「準備されたもの」と同格に訳すのが Kasse, RThPh 99 (1966) 177 (V. 252) と Tardieu. Krause は対格(目的格)の n として訳すため、「心魂的実体」は「諸力たち」が準備したものでなくなっている。

(99) 50¹⁰⁻¹¹ nharmos の n を、III 23¹¹ に準じて mn (並列接続詞) に修正する訳。

(100) 本文が脱落していると思われる箇所。

(101) 50¹¹⁻¹² autamio の三人称・複数形を受動態に代わる一般的主語とする訳。Tardieu がこれと同じ。Kasse, RThPh 99/1966, 177, V. 253, Till/Schenke, Krause はいずれも「彼ら」=「諸力たち」。

(102) 51³⁻⁴ mparchon inte peprounikos は文字通りには「多情なる者(男性・単数)のアルコーンの」、あるいは「あのアルコーンの、すなわち、多情たる者の……」。Till/Schenke, Kasse, RThPh 100 (1967) 1 (V. 395), Tardieu がこの線。われわれの訳は写本Ⅲの並行箇所 23²¹ に準じて hin ouprounikon と読み直す訳。Krause の訳がこれと同じ。

(103) Till の復元に従う。Kasse, RThPh 100 (1967) 1 (V. 395) のみ独自の復元(……)[r.aso]uō[s ncitmaau etik] tcom—Muséon 78 (1965) 74 参照)に基づき「〔母は〕……力を〔放出したいと思〕った。」と訳す。

(104) 創世記 2⁷ に対する擲喩。「霊」(truejua) はいって「氣息」と「母親の力」の両義。

- (105) Tillと共に *teunou* と復元する訳。Till/Schenke は *tounou etnmau* 「その時」。Tardieu は並行箇所Ⅲ 24 の被損箇所と合わせ、いずれも “(et s'emplit de lumière)” と補充するが、これを支える本文の復元は不明。
- (106) 内容的にはこの理由句はここで終わらず、52¹¹ (われわれの翻訳本文で三行後の段落末尾) までを含むべきである。この点では Tardieu の意識が適切。
- (107) 原文では現在完了第一形。しかし、これを過去完了の意に訳さないと (49¹⁰—50¹⁴ との) 脈絡が通じない。諸訳が正しくそう訳している。Krause のみ未完了過去に訳すのは理解に苦しむ。
- (108) 「第一のアルコーン」、あるいは、ヤルダバオトと同じ。
- (109) 53^{4—6} は原文通りに訳すと、「彼、すなわち彼と彼の大きいなる憐みとが、善なる霊を送った……」となる。Kasse, RThPh 100 (1967) 3 (V. 409) と Till/Schenke がこの訳。われわれの訳は Till 146 (53^{5—6} の註) と共に *ntof mn pefna etnašof* を、写本Ⅲの並行箇所 (25⁶ 以下) に準じて、*auō ete naše pefna* と読み直す。右の原文の *ntof* を 53⁴ の *afinnou* の三人称・男性・単数と同定し、*pefna etnašof* を *pepna etnanouf* 「善なる霊」(50^{4—5}) に並列させると、「彼は善なる霊と彼の大きいなる憐みを送った」となる。Krause と Tardieu がこの訳。
- (110) 創世記 3²⁰ 「さて、人はその妻の名をエバと名づけた。彼女がすべて生きた者の母だからである」のエバのこと。ここでエバ (*hawwēh*) とは、「生命」の意味で、ギリシャ語旧約聖書 (『七十人訳』) では同じギリシャ語 *zōē* が当てられている。但し、われわれの『ヨハネのアポクリュフォン』の神話の展開の上では、肉体のエバが登場するのは 59¹² 以下であり、目下言及されている「ゾーエー」はその肉体のエバに先立って存在する本質 (「光のエピノイア」として区別されている)。

(111) 53²⁰ *innein*……*alla* は構文上少し困難な文章。おそらく *not (in)*—*but (alla)* の構文の *not (in)* にちやうど否定の未来第Ⅲ形が続いたために否定辞 *ἵ* が縮約されたものと思われる。

(112) *Till/Schenke* と共にⅢ 25²⁰—21 に準じて復元。Tardieu も同じ。Kasse, *RThPh* 100 (1967) 4 (V. 412) と Krause は *Till* に従って、「我々に等しい我々の姉妹が」。

(113) Krause は「そして彼らは見上げた」と訳す。写本Ⅱの並行箇所 (20³²) が用語は違うが同じ意味の表現になっている。この方が原意に近いと思われる。

(114) *Till* 150 (55¹⁶ への註) が指摘するように、写本Ⅲの並行句 *inpeproontos* (*ὑπόουτος* < *ὑπόειν* 「先在の」) の方が原意に近いと思われる。

(115) 創世記 2¹⁵、3²³—24、エゼキエル 31¹⁶、ヨエル 2³ 参照。いわゆる「エデンの園」はギリシャ語旧約聖書では *ἡ ἀνάδεικος τῆς τρυφῆς* と訳される。つまり、「エデン」(*ēdēn*) とは「無上の歓び」(*τρυφή*) の意。

(116—116) Kasse, *RThPh* 100 (1967) 6 (V. 427-429) はこの部分を一種の詩文と見做して引用符を付している。「彼ら」は直前の文脈との関連では少し不自然であるが、54¹¹—55³ に接続すると考えればよい。

(117) 創世記 2⁸ 以下参照。

(118—118) 原本文はこのようなしか訳せない。本文がかなり損われていると思われる。写本Ⅲの並行箇所は、「その種子は暗やみの〔中に〕芽を出した。〔それを〕食べる者たち、〔彼らの〕住み家は陰府である」と読む。Tardieu は BG の本文もこれに準じて復元して訳す。

(119) 創世記 2⁹ 参照。

(120) 写本Ⅲの並行句 (28¹⁶—17) は「彼 (アダム) を」。BG はアダムとエバのことを考えている。但し、このエバは

53¹⁰の「ゾーエー」(Ⅱ「光のエピノイア」)のことではなく、59¹²以下で創造される肉のエバを先取るもの。

- (121) 写本Ⅲの並行記事(28²⁰以下)は「彼ら」で一貫している。BGの三人称・女性・単数は文脈上少し不自然。おそらく、蛇の誘惑に最初に陥る者としての肉のエバを考えていると思われる。

- (122) 58⁷ seir soou (三人称・複数)を、Tillに従い eser soou (未来第Ⅲ形、三人称・女性・単数)に修正する訳。
Ⅲ 28²²⁻²³ 参照。

- (123) 肉のエバ、または「光のエピノイア」。

- (124) 58¹³ ἰβσε がギリシヤ語 ἰβση 「忘却」の対応語であることは H. M. Schenke が M. Krause/P. Labib, Die drei Versionen des Apokryphon des Johannes, Wiesbaden 1962 に対して寄せた書評 OLZ 59 (1964) Sp. 548-553 を参照(特に 551)。しかし、そのシェンケも Till/Schenke の独訳ではティルの初版の “Erkenntnisunfähigkeit” を訂正し忘れている。

- (125) イザヤ 6¹⁰ 参照。

- (126) 創世記 2²¹ 参照。

- (127) ヨハネ 1⁵ 参照。

- (128) 59¹⁵ min oumorphē inshime で「女の形」は接続詞 min により、直前の「こしらえ物」(ἡ δόξα)に並行させられている。厳密な訳は「一つのこしらえ物と女の形を造ることにした」。写本Ⅲの並行箇所は min を属格詞に読んで、「女の形のこしらえ物」。内容的には創世記 2²²を参照。

- (129) 59¹⁶ aftounos をⅢ 29²¹に従って aftounos <s>と読む。

- (130) 創世記 2²² 参照。

- (131) 写本Ⅲの並行句は *tetsynousia etine immof* 「彼に似た彼のつれあい」。われわれの訳は、肉のエバの中にもアダムの「力」の一部が入っていることを示唆するもの。

- (132) 創世記 2²³⁻²⁴ 参照。

- (133) (133) これは原本文通りの訳で、Kasse の訳に近い。Till/Schenke は「何故なら、彼らはあの母親の伴侶を遣し、彼女を立て起すであらうから」。これは 60¹³ の (*ebol*) *hm psynzygos* を (*ebol*) *impsynzygos* と読み換えて初めて可能性な訳(並行句Ⅲ 30¹¹ がそう読んでいる)。Tardieu も後者に近いが、「彼ら」を一般的主語に解して受身形で訳す他、写本間の差異をならす方向に進んでいる。しかし、正にこの箇所は四つの写本間の差が極めて大きいところであり、安易に調和させるべきではない。

- (134) 写本Ⅲの並行句 (30¹²) は「彼女(母)の欠乏(*ὑπέροχμα*)を」。

- (135) 創世記 3²⁰ のエバのこと。前出註110参照。

- (136) Kasse, RThPh 100 (1967) 11 (V. 453) は、ここで読点を置き、直前の文の一部として訳す。

- (137) 創世記 3¹⁶ 参照。

- (138) ここを正しく過去完了の意味で訳すのは Kasse, RThPh 100 (1967) 12 (V. 459) と Krause.

- (139) 63⁷⁻⁹ は構文上困難な文章。並行箇所にあたるⅢ 32¹⁻² / Ⅱ 24²⁸⁻³² は、構文上も意味上もわれわれの本文と異なりすぎて、本文復元の参考にならない。われわれの訳は *taí et̃po noueíne ebol him peuantimimon* を主語、先行する *ebol hn tiousia te* を述語とする副詞文とする訳。ちなみに *õõia* を *õuouõia* 「交接」と同義に解する。(この点は並行するⅢ 32¹ についても同様に必要。Ⅱ 24³⁰ は *õuouõia* と正しく読んでいる。) Krause, Tardieu の訳も実質的にわれわれの訳と同じ。Till/Schenke も構文についてはほぼ同様にとっていると思わ

れるが、*ovaiá* を “Wesensart” と訳す。Kasse, RThPh 100 (1967) 14 (V. 471) も同様。

- (140) 前出 60³、および註131参照。*ovaiá/ovovoiá* が 60³ 以後この辺りまで、積極的(肯定的)と否定的の両義で、入り乱れて用いられている。このため意味論上のつながりが著しく困難になっている。

- (141) 64⁸ *efatahoou* を *efnatahoou* (III 32¹⁸) と読む。

- (142) 「プレーローマ」のこと。

- (143) あるいは 64⁵ 「(セーツの)種子」を受ける。Tardieu がこの見解。

- (144) Till 168 (64¹⁵ への註) に従い、*naónh inhou* を、写本 III の並行句 (32²⁴) から推して、*nanouhm ehoun* と読む訳。Krause を Tardieu が同じ見解。Till/Schenke は本文通りに読んで、「あらゆる者の魂が光の純粹さよりも多く生きるのですか。」と訳す。Kasse, RThPh 100 (1967) 16 (V. 478) の訳もほぼこれと同じ。

- (145) Tardieu は 65⁴⁻⁵ *eaunouhíb min tcom* を 65³ の「生命の霊」の修飾語とする訳: “Ceux sur qui l’Esprit vivant descendra conjointement avec la puissance seront sauvés……” われわれの訳は Kasse に近い。

- (146) 写本 III の並行箇所 (33⁷⁻⁸) は、「かの場所 (四つの大いなる光の中) で」。Till 170 (63⁸⁻⁹ への註) は写字生の混乱を想定し、III と同義の本文 *mpma gar etmman senatbboou* の復元を提案している。

- (147) 「プレーローマ」、および、そこに帰ってゆくべき「セーツの種子」、「揺らぐことのない種族」のこと。

- (148) 現に「立っている」すべての人間の中には「あの力」が入っているということ。

- (149) 67⁷ *ntreúpos* の目的語尾 (三人称・女性・単数) は、先行する文脈との関連では「あの力」(67⁴)、後続との関連では「魂」。但し、両者は 67¹² で同定される。

- (150) (150) Till 174 (67¹¹ への註) と共に *intu* を *nnoute* と同義にとる訳。前出註 48 参照。この場合 67¹¹ の *epónh* の

e は前置詞で「(生命)のために」。Tardieu は不定法 (ti) + 対格 (epōnh) とつて、直前の cōpe と並列させ、「霊」に形容詞としてかける訳 “cet Esprit vigoureux et vivifiant”

- (151) 67¹⁴ ešauēi を ešafei と修正。

- (152) 67¹⁶ šafsōk を Till 174 (脚註) と共に、写本Ⅲの並行句 34¹⁷ に準じて、šausōk と修正する訳。

- (153) 後続の文脈から推すと、魂の上に生命の霊が到来した者たち (67⁷⁻¹⁴) のこと。模倣の霊が到来した者たち (67¹⁴⁻¹⁸) のことではない。

- (154) 68⁴⁻⁵ euma itepsyche の euma in を Till/Schenke 176 (68⁴ への註) は削除して、「模倣の霊よりはるかに勝っていた魂——とはすなわち、あの力——、この魂は強く……」という訳をも提案している。しかし、

67¹⁹—68² のヨハネの質問への回答として読めば、構文上の不完全さも理解可能である。

- (155) 肉体(「鎖」)を脱ぐこと。写本Ⅲの並行句 35¹⁰ 以下参照。

- (156) 肉体(「鎖」)を着た魂(心魂的人間)はその肉体と等身大と考えられている。Till/Schenke 179 (69¹⁵ 以下への註) 参照。

- (157) 直訳では「人間」。

- (158) 70³⁻⁴ epepna impōnh inhētif の冒頭の e = ere (Till, Koptische Grammatik §329) とつて、全体を関係文として「別の者」(70³ pkeoua) にかける訳。Till/Schenke 180 (脚註) 参照。Kasse, RThPh 100 (1967) 21 (V. 502) は前置詞にとるが、文意がうまく通らない。

- (159) 直訳では「与えられ」。並行句Ⅲ 35²⁵ は「別の者に与えられ」と読む。われわれの本文も直前の min (70³) を、並列の接続詞ではなく前置詞 in に修正 (Till/Schenke 180. 脚註) すれば写本Ⅲと同じ訳になる。

(160) 70⁴⁻⁵ の euakolouthesis naf を付帯状況文 (Umstandssatz: Tili, Koptische Grammatik §328ff) による。naf = 「その者に」は先行する「別の者」(70³)と同じ。Tili/Schenke と Krause は 70³⁻⁷ の関係文(前出註158参照)の中へ組み込んで訳すので、naf は「生命の魂」を受けることになっている。Tardieu はわれわれの訳に近い。

(161) マルコ 3²⁹ (マタイ 12³² / ルカ 12¹⁰) 参照。

(162) 71⁵⁻⁶ nteretmau に始まる時の条件文 (Temporalis) の前文に定動詞が欠けているため、極めて訳出が困難な箇所。写本Ⅲの並行箇所 36¹⁸⁻²⁵ は本文消失が甚だしく、われわれの箇所の本文復元には役に立たない。写本Ⅱの並行箇所Ⅱ 27³³—28⁵ は、「憐みに富む母父 (mporataw)」、あらゆる形をした聖なる霊、(すなわち) 慈悲深く我々と共に労する者——これは光のプロノイアのエピノイアのことである——、そして彼 (= 「聖なる霊」、または「母父」) が完全なる種族の種子と思考と永遠の光とを呼びさました」。Ⅲ 36²³ でも、「呼びさます」行為の主語は「エピノイア」である。ところが BG 71¹⁰⁻¹¹ では ntaftounosf mpmeue 「彼が……思考の中に呼びさました」が、関係文として「種子」(71¹⁰) にかかり、しかもこの「種子」が「憐みに富む母」、および「エピノイア」と並列 (71¹⁰ min) させられている。その結果、主語を三つ並列させるのみで定動詞を欠いた前文になっている。Kasse, RThPh 100 (1967) 22 (V. 510) と Krause も本文の被損を想定。Tardieu は写本Ⅱに近づけて意識している。

(163) 創世記 6⁶ 参照。

(164) 創世記 6¹⁷ 参照。

(165) 創世記 6¹⁴、7⁷ 参照。

(166) 構文の解釈は Kasse, RThPh 100 (1967) 25 (V. 531) と同じ。Till/Schenke は「そして彼（ノア）は、彼と共に彼らを照らす光の中にいた者たちと一緒に、彼の支配を認識した」。Krause と Tardieu は「彼は彼の支配と、彼らを照らす光の中に彼と共にいた者たちを認識した」。

(167) 写本Ⅲの並行句 (38⁶) は「高きところ（プレローマ）の支配」。

(168) 写本Ⅲの並行句 (38¹¹⁻¹²) は「彼は彼の」。文脈上はこの単数形の読みの方がよい。

(169) 創世記 6⁴ 参照。

(170) 「光のエピノイア」のこと。53⁴⁻¹⁰、71⁷ 参照。

(171) 写本Ⅲの並行句 (38¹⁹) は「あの霊を模倣 (*μίμνησκειν*) して」。おそらく、BG のコプト語訳者が、ギリシャ語原本の *μιμνησθαι* を *μιμνησκεν* に読み間違えた。Till/Schenke 188 (74⁶ の註) 参照。Tardieu は写本Ⅲに合わせて修正。

(172) 74¹¹⁻¹³ *ipefsmot epeine reneuhai* と *ipefsmot epeine inneuhai* と修正する訳。Till/Schenke 188 (脚註) 参照。Krause も同じ。

(173) 74¹³ *tseio mmau mpna* と Till/Schenke 188 (脚註) と同じ、*autseio mmou mpepna* と読む。Krause と Tardieu も同じ。

(174) 74¹⁴⁻¹⁵ *ntafmoukh nmmau hm pkake* 「彼女たちを暗やみの中で苦めた」と、Till/Schenke 188 (脚註) に従い、*ntafmouh mmou mpkake* と修正する訳。Kasse, RThPh 100 (1967) 26 (V. 535) と Krause は本文通りに読む。並行するⅢ 38²⁴ は *meh inkake* 「暗やみでいっぱい」と読み、「模倣の霊」にかかる形容句。

(175) または、「彼女たちは彼らの……子を生んだ」。

(176) 「彼女たち」、「暗やみの子ら」のいずれを受けてもよい。

(177) 75¹¹ tmaau neiot の訳。荒井献、Znr Christologie des Apokryphon des Johannes, NTS 15 (1968/69) 302-318 (特に307, Ann. 1) は「父のような母」(“väterliche Mutter”)と訳す。われわれの翻訳本文で「その褒むべき者」、「父母なる者」、「あの憐みに富む者」はすべてコプト語では女性形の名詞であり、すでに28³で両性具有の「男女なるアイオーン」と呼ばれているバルベロ・プロノイアのこと。写本IIとIVでは「母父」(untpordawp)で、よりしばしば現れる(特にII 5⁷参照)。以上、さらに詳しくはT. Onuki, AJBI XIII (1987) 132f.

(178) 75¹⁴以下全体は文脈が通らない箇所。写本IIでこの部分に該当するII 30¹¹—31²⁵では、プロノイアが三回にわたって地上に到来し、一人称で語りながら目己を啓示する。おそらく、これが原本の元来の形で、BG(写本IIIも同様)の本文は、紙幅が尽きたというような技術的な理由も含めて、何らかの理由で短縮された形と考えられる。その際、「私」、すなわち、「救い主」(キリスト)がプロノイア(「父母」、「母」)のすでに行われた到来について説明するという形式に変えられたと推定される。この点について詳しくは、T. Onuki, AJBI XIII (1987) 93-95, 114-116 参照。

(179) 76² hatahē や A. Werner, Das Apokryphon des Johannes in seinen vier Versionen synoptisch betrachtet und unter besonderer Berücksichtigung anderer Nag-Hammadi-Schriften in Auswahl erläutert, Diss. (Masch.), Berlin 1977, 231 と共に時間的な意味で理解する。Tardieu も同様であるが、Kasse, RThPh 100 (1967) 29 (V. 572) と Krause は場所的な意味にとり、「私の前へやってきた」と訳している。

(180) 76³ の on は、構文上も意味論上も役割不詳。

(181) 76⁴ tahes pesperma や Till/Schenke 192 (脚註) に従って tahes pesperma と修正する訳。